<総 説>

スポーツ科学とスポーツ史

岸 野 雄 三

(昭和50年2月17日)

Sport Science and Sport History

Yuzo Kishino

College of Physical Education

University of Tsukuba

1960年代になって、「スポーツ科学」(Sport science)という名称が脚光を浴びてきた。それにともなって、スポーツ史、スポーツ社会学、スポーツ心理学といった名称も用いられはじめた。これらはすべて、スポーツ科学の「専門分科学」(discipline)である。したがって「スポーツ史」(Sport history)も、このニュー・サイエンスの一専門学として研究されるかぎり、スポーツ科学の理解が先決問題となる。

周知のように、これまでスポーツ活動の研究は体育の領域として研究されてきたが、最近狭い「体育学」(physical pedagogics)から「体育科学」(science of physical culture)へと発展してきた。したがって今日、体育科学とスポーツ科学の関係を確認することは、「体育史」(history of physical education)やスポーツ史を研究するためにも必要になってきた。

そこで本稿は、論題に示したように「スポーツ史」を問題として取りあげ、次の4点から問題を解決しようとした。すなわち、その第1はスポーツ科学と体育科学の関係について、第2はスポーツ科学の由来と特性について、第3はスポーツ科学とスポーツ史の関係について、第4は科学としてのスポーツ史の展望についてである。

Abstract

Following the inception of the term sport science in 1960s, terms such as history of sport, sociology of sport, and sport psychology have also been popularly used. These are all specific disciplinary areas of study in sport science. Therefore, so far as history of sport is also going to be studied as one of the specific disciplines in this new science, it must be a prerequisite for the students of sport history to fully understand the nature of sport science.

Though it is a well-recognized concept that the study of sport activities had so far studied as an area of research in physical education, it has recently been further developed from the narrowly conceptualized physical pedagogics to the broad concept of science of physical culture. As a consequence, today, it is necessary to identify the relationship existing between science of physical culture and sport science in order to pursue fruitfully the studies of history of physical education and sport.

筑波大学

Therefore, in this brief treatise, the present author took up the problem of sport science and history of sport as shown for the title and tried to solve it from the following four points of view: 1) the relationship between sport science and science of physical culture, 2) the origin and nature of sport science, 3) the relation between sport science and history of sport, and 4) the perspectives of history of sport as a discipline

(Yuzo Kishino: "Sport Science and Sport History, *Research Journal of Physical Education*, Vol. 19, No. 4・5, 1974, pp.167~174)

1. スポーツ科学と体育科学

戦後における体育・スポーツの科学的な研究は驚ろくほどの発展をみせている。それらの研究は、戦前からスポーツ医学と称されてきた領域をはじめ、哲学的、歴史的、社会学的、心理学的、教育学的な専門諸学に分化発展して今日にいたっているが、戦後、これらの専門諸学は統合されて、体育科学とかスポーツ科学などと総称されている。この体育科学とスポーツ科学とのちがいについては、いろいろな見解があるが、それを簡単にいえば、次のように区別することができる。

第1に、スポーツ科学は体育科学よりも広く解されている。それは同時に体育とスポーツの相違にあるともいえる。体育を字義通りに「身体教育」(physical education)とみる限り、それは教育の領域であり、一方、身体活動を教育的な価値以上に拡大して、広く自然的、文化的、社会的な活動とみる限り、スポーツの領域として考えられる。したがって、この場合のスポーツとは運動一般をさし、したがって特定の運動形態のスポーツ教材、あるいはツルネンやジムナスティックスと区別されたスポーツとはちがって、スポーツという語自体が広義に解されている。

スポーツ科学が体育科学より広いといわれるのも、このような理由からである。けれども、最近のドイツ語使用国、それに国際体育術語研究会などの用法に示されているように、身体活動の諸現象をとらえる上位概念として、Körperkultur(physical culture)を使用するとなると、この文化概念の下位に教育概念としての Körpererziehung(physical education)が包摂されることになり、したがって前者の科学はスポーツ科学や身体教育科学より広いことになる。

不幸なことに日本では、この両概念、すなわち physical education と physical culture とを、同じ「体育」という訳語で表現するために、science of physical culture も science of physical education も区別がつかなくなった。それに physical culture という原語自体の意味も何回か変遷している。クーベルタンなどは、それを体力づくりの基礎訓練のシステムと解しており²⁾、また、それと類似の用法は20世紀初期のアメリカにもみられる³⁾。いふ今日でさえ、フランス語の culture physique は、かの有名なパリのボディー・ビル雑誌名に示されているように、狭義の筋力トレーニングの意味に使用されている。

これとは逆に、東欧はもちろんのこと、オーストリアや西ドイツでも、Körperkultur や Leibeskultur は広義に文化=社会概念として使用されるようになってきた。われわれは、文化概念として用いられている physical culture を一応「広義の体育」と訳し、教育概念としての physical education を「狭義の体育」と訳し、便宜的に区別しているが、同じ「体育」という語で広狭の区別を断わりなしに使用した場合、原語との混乱は避けられない。

東ドイツのエアパッハ⁴⁾などは、Körperkultur と Sport が教育概念を越えている点で同義語とみており、したがって Körperkulturwissenschaft と Sportwissenschaft を、ほとんど同義に解している。だが、厳密にいうと、この身体文化の概念は運動文化をも含めた最広義の概念であり、オーストリアのグロル⁵⁾や西ドイツのエッペンシュタイナー⁶⁾がいうように、それが健康や美容・整形などの内容をも包含するために、スポーツとスポーツ文化の概念よりも広い意味をもっているといえよう。同じような理由で、「身体文化科学」(広義

の体育科学)は、スポーツ科学よりも広い概念とみなされる。

しかし、国際的にいって、広義の「体育科学」(=身体文化科学)と狭義の「体育科学」(=身体教育科学)、それにスポーツ科学の解釈や定義には、まだ若干の曖昧さがみられる。それに1960年代にいたるまで、Körperkultur の概念は、ソビエトや東独などの社会主義国体育の中核的概念であるように解されていたという事情もあり、したがって、これまで馴染みの深いスポーツから合成された Sportwissenschaft (Sport science) という名称のほうが、国際的にも公認されやすいという事情もあった。

2. スポーツ科学の過去と現在

スポーツ科学は、最近の日本でも、しばしば「ニュー・サイエンス」とか「ヤング・サイエンス」といわれる。しかもこの場合の「ニュー」とは、たとえば一般システム理論が学際的研究における統一理論として「新しい」とか、情報科学が既存の自然・社会科学を越えた「新」科学であるとかいわれるときとちがって、経験的な未熟性を脱したという意味の形容詞として用いられている。したがって、それは、既成の科学理論とちがった新理論としての「ニュー」の意味ではなく、未熟さや若さを脱した意味での「ニュー」であることを、まずもって自戒すべきであろう。

このような意味で、スポーツ科学は、とにかく1970年代のニュー・サイエンスといえる。しかし、たとえ未熟であるにしろ、この科学が戦後の発展を実現しえたのは、それなりの歴史的蓄積があったからである。筆者も再三指摘したように⁶⁾、スポーツを科学的に研究しようとする国際的な活動は、すでに第1次世界大戦前、ドイツの「スポーツ医学」にはじまっている。そして1920年代には、「体育科学」(Turnwissenschaft)というドイツ的造語とともに、より国際的な「スポーツ科学」(Wissenschaft des Sports, Sportwissenschaft)という名称が用いられてきた⁷⁾。しかしスポーツ科学が、医学的な研究の「従属学」(sub-discipline)としてのレベルを越えた独立学であるかどうかの問題になるものは、1930年前後か

らである。

ポーランドのG・ピアシェフスキ女史の論文は、その好例である⁸⁾。彼女はスポーツ科学を身体運動の科学と同じものと解しているが、はやくも彼女はスポーツが「科学の境界領域」(Grenzgebiet der Wissenschaft)であると述べている。つまり彼女にとってスポーツ科学は、「自然科学」と「人文科学」との両部門から研究される学際的な研究なのである。ここで自然科学の専門諸学としては、生理学、解剖学、生物学、衛生学、化学、人類学などがあげられ、人文科学のそれとしては、教育学、心理学、哲学、歴史学などがあげられている。日本では、今日においてもあまり注意されていない生物学や人類学が、ここに特記されていること、また今日では社会科学の中核的専門学に考えられてる社会学が列挙されていないことなども興味深い。

その後、第2次大戦への突入とともに、スポーツ科学の可能性に関する論争も消滅した。それが新しい次元で注目されるようになるのは、第2次大戦後である。日本でスポーツ科学という名称に対する関心は、東京オリンピック大会前後から急激に高まってくる。東京に「スポーツ科学研究室」が設立されたのは、1961年で、1963年には、それが日本体育協会の「スポーツ科学研究所」に発展し、翌年に控えた「国際スポーツ科学会議」(International Congress of Sport Sciences)の準備団体としての「日本スポーツ科学連合」(Japanese Union of Sport Sciences)も、この1963年に結成された。

西ドイツでは、フランクフルト大学で、「スポーツ科学」という名称の講座が1965年に設置された。それと同時に、この頃からスポーツ史やスポーツ社会学、スポーツ心理学などの国際的研究組織も設立されていく。1971年には西ドイツで、“Sportwissenschaft”という誌名の季刊誌も発刊されるにいたっている⁹⁾。もちろん、今日でも、ベルネット、フェッツ、ヴァウベル、ガブリエルなどは、安易にスポーツを肯定したかにみられる Sportwissenschaft の名称には批判的であるようだ。日本の場合には、深い議論はなされていないが、「スポーツ科学という名称はどうも」とい

った感情論から反対する一般学者も少なくない。

要するに、スポーツ科学は語感からして「非学問的」(nicht akademisch)だという印象が生じがちで、むしろ体育科学という名称のほうが無難であるといった意見が跡を絶たない。たしかに、スポーツ科学の名称をめぐる争った論者のなかには、スポーツと連想される競技過剰の現実を背景に、疑点を指摘した人もいる。しかもこの点は、日本ばかりでなく、イギリスやアメリカやフランスにもいえることであって、ある学者がいうように、特に大学人にとってスポーツと題した研究は“Academic Taboo”であった。

しかしスポーツ科学という名称に批判的な一般学者の場合、それがスポーツ科学の最近の進歩とその成果を知らないことに原因している場合が多く、スポーツ「科学」に対する疑問も、このような無知から生ずることが少なくなかった。というのも、現代のスポーツ科学は優れた体育学者によって研究されているだけではない。たとえば、遊びの社会学で世界的に有名なR. カイヨワ¹⁰⁾や、これまた余暇科学の先駆的学者のJ. デュマズディエ¹¹⁾などのスポーツ社会学的な研究もあれば、古典古代学者のH.A. ハリス¹²⁾やR.S. ロビンソン¹³⁾などのスポーツ史的な研究もあるからである。しかもこれらの専門学者は、体育学者に劣らない熱意をもって、スポーツ問題の解明に努力しているのである。

3. スポーツ科学とは何か

スポーツ科学とは、形式的に言えばスポーツを対象にした科学研究であるが、すでに述べたように、「スポーツ」という名称を用いることについては種々の誤解やら問題があった。「スポーツ科学」というと、オリンピックと関連して国際的に研究されてきたために、教育や文化を無視した競技力向上だけを目的とした科学と誤解される場合もあった。それに、学問的にも若干の問題が残されている。たとえば、スポーツ科学という名称では、人間の表現運動が研究対象から除外されてしまうとか、スポーツ科学は保健や体育を含んだ身体=運動の最広義の科学として、「身体文化科学」、すなわち Science of physical culture (西

独 Leibes-[東独 Körper-] kulturwissenschaft) に従属させるべきであるといった批判もあった。

だが、最近注目されてきた「身体文化」という概念にしても問題が残る。それが教育的価値を越えた広い身体的(運動をも含む)な文化的現象であり、物質文化と精神文化を包含した概念であることは理解できる。しかし、この「身体文化」に科学を加えた学術語を造語した場合、その「身体文化」科学は身体「文化科学」とも誤解される恐れがあり、リッケルトのこのような自然科学と対照される「文化科学」(Kulturwissenschaft)とまちがわれやすい一面もある。この点英語になると、ドイツ語の Körperkulturwissenschaft や日本語の身体文化科学とちがって、Science of physical culture (身体文化の科学)と書かれるので、それがどのような種類の科学かは問題があるにも、上記のように文化科学などと誤解されずにすむのである。

したがって、日本語でも「身体文化の科学」と表現すればよさそうであるが、しかし、このような国語的表現では、学術語として不相当とみなされるのが、日本の通念である。この点からすれば、スポーツ科学として一語にまとめた表現のほうが、この新興科学の学術語として、より適當であるという理論も成立する。このようにして、名称の問題は、まだ議論がつきないようである。けれども、詳論は、またの機会にゆずり、次にスポーツ科学の本質論にふれる問題として、「スポーツ科学は Sciences (複数) か Science (単数) か」という問題に言及してみたい。しかも、それは同時にスポーツ科学論に発展する問題である。

すでに述べたように、「スポーツ」科学は歴史的にみて、「スポーツ」医学を基盤にして発展し国際化してきた科学である。その頃、スポーツ医学は基礎と臨床にわたる諸領域はもちろんのこと、生力学的な運動学も生理学に含め、それに psycho-somatisch な領域、さらに senso-motorisch な領域から、身体運動の教授法にいたるまでの、いわゆる Grenzgebiet までを含んでいた。その好例がベルリンのオリンピック大会に開催された第2回スポーツ医学会議の発表である¹⁴⁾。その後は戦争のため、スポーツ医学の国際活動は中

断されたが、戦後になると、いわゆるスポーツ医学以外の研究が、次第に分化発展した。スポーツ医学から独立してスポーツ心理学の大会が開催されたのは1965年であるが、さらに最近では生力学の研究も国際的組織として独立した。また60年代には、人文・社会科学関係の専門分科学、たとえばスポーツ社会学やスポーツ史の新しい国際的機関も結成された。

伝統のあるスポーツ医学は、戦後も基礎と臨床にわたる専門諸学が含まれているが、それを広く解すか否かは、いろいろである。しかし戦前とちがって、その分野は医学的な disciplines に制限されて使用されるようになった。もちろん H. E. ポックもいうように¹⁵⁾、この分野の研究は精神病理学、心理学、生力学をはじめとした disciplines と決して無関係であるというのではない。

以上の説明からもわかるように、スポーツ科学とは物質科学や社会科学などの単独的な科学とはちがった諸科学から構成された総合科学である。それは、自然科学系の代表ともみられているスポーツ医学を筆頭にして、戦後そこから独立したスポーツ心理学やスポーツ教育学、それに新しく国際組織を作ったスポーツ社会学、スポーツ史、スポーツ哲学の専門諸学、さらにスポーツ運動の生力学やキネシオロジー、あるいは、ボイテンディイク的な機能的運動学やマイネルの形態学的運動学をも含めて、いろいろな科学の disciplines や sub-disciplines から構成された総合的な科学であり、その方法論も決して一様ではない。

つまるところ、この総合科学は人文科学や社会科学、物質科学や生物科学などの諸科学から総合された科学であり、この意味で人によっては、この科学は sport sciences と複数に書かれる。だが、この複数形の名称に反対する研究者も多い。彼らはスポーツ科学は諸科学の単純な寄せ集めではなくして、総合科学としての独自性をもった一個のニュー・サイエンスであり、だから sport science と単数に表現すべきであるという¹⁶⁾。こうした議論は、その背景に論者各人の考える科学論があるからして、簡単に議論の決着がつくわけではない。

それに、この Science という学術語自体が広狭

いろいろに使用され、そのために混乱は、さらに大きくなる。というのも、たとえば社会「科学」を social sciences と複数形にし、そのなかの政治学や歴史学や教育学の分野を、discipline ではなく science と書く場合があるからである。この際の社会「科学」は、歴史科学や教育科学にわかれ、さらに、たとえば教育「科学」(science)は教育哲「学」や教育心理「学」などの discipline からなると考えられている。しかも場合によっては、この discipline をも science に置きかえて使用する研究者もいる。こうなると、明らかに科学と専門分科学との混乱が生ずる。

このように問題は多いが、要するにスポーツ科学は諸科学にまたがる総合科学である。したがって現代のスポーツ科学は、一時代以前のスポーツ医学に肩代りされていたような科学ではないし、ケニヨンのいうように¹⁷⁾、「運動生理学」(exercise physiology)が「女王の時代」も去ったのである。総合科学として「若く、新しい」スポーツ科学は、いま発展途上にある。したがって、たしかに、この科学を構成する専門諸学のなかには未熟な研究領域もあり、また総合科学としての方法論の確立もこれからである。まず第1は、専門諸学の充実であろう。それなしにスポーツ科学の発展は考えられないが、しかしスポーツ科学の全体的視野を無視して専門だけを研究してすまされる時代でもなくなったのである。それは、スポーツ科学とスポーツ史の場合とて同様である。

4. スポーツ科学とスポーツ史

スポーツ史は、スポーツ科学の専門分科学として研究される以上、その全体系の一部として考える必要があろう。他方、スポーツ史がひとつの歴史研究である以上、それはまず第1に、人文科学的研究として位置づけられる。この点は、歴史が「哲・史・文」として人文科学に数えられてきた学問の伝統からして当然のことといえよう。しかし、歴史研究は人文科学的な一般史のほかに、社会科学の専門諸学の特殊史としても研究されている。たとえば経済学や社会学などは、一様に理論と歴史と政策などに分けられ、歴史的研究は重要な部分を占めている。

このように、歴史研究には、一般史学に即した研究と、経済史や社会史などの専門諸学における歴史研究とがあり、いわゆる一般史的研究と特殊史的研究が考えられる¹⁸⁾。しかも、このような関連を縮小して置き換えたものが、まさにスポーツ史研究の諸領域であるといえる。というのも、以下説明するように、スポーツ史がスポーツ科学の一専門学として研究される以上、総合科学としてのスポーツ科学の特性からして、そのような多面的広域性が生ずるからである。

スポーツ史には、まず第1にスポーツ科学の一専門分科学としての固有の一般的研究領域がある。次に特殊史的歴史研究としては、スポーツ社会史、スポーツ経済史、スポーツ教育史といった社会科学的領域がある。そして、たとえばスポーツ社会史はスポーツ社会学へと発展し、それはさらに社会史や社会学へとつながっていく。われわれは、これらのスポーツ教育史（狭義の体育史）、スポーツの社会史、経済史、政治史などの研究領域を総括して、スポーツ史の「中間領域」と呼び、上記のスポーツの一般的研究領域を「固有領域」という。それが中間領域といわれるのは、一面では、この領域がスポーツの教育学や社会学などの理論を無視して研究が不可能であるという理由からと、他面では、それがスポーツ史に関係ある以上、スポーツ史的な一般理論を無視して考えられないという理由によるのであって、このようにそれが専門学の両方の領域にまたがっているために、中間領域であるといわれるのである。

この中間領域の研究とは、つまるところ小型化された一種の interdisciplinary な研究である。すなわち、この領域はスポーツ教育史やスポーツ社会史などの研究を介して、スポーツ史学と、スポーツ教育学やスポーツ社会学¹⁹⁾などの専門諸学の相互交流が行なわれる学際的な研究領域である。もちろん、スポーツ心理学史とか、スポーツ社会学史などの学説・研究史的な領域は、今後スポーツ科学の専門分科学が発展すればするほど、その途の専門学者でないと研究も無理になるが、他方、スポーツの教育的、社会的、文化的な具体的研究になると、ますます両者の協同研究が必要になってくる。

ところで、スポーツ史の固有領域に関する研究では、まずスポーツ史固有の理論は何かということの認識から出発しなければならない。専門学としてのスポーツ史の研究は、それが歴史研究である以上、ドイツ人のいう「親科学」(mutterwissenschaft)としての歴史学的原則に基かなければならないが、スポーツ史としての固有の理論を確立するためには、スポーツ科学的、スポーツ哲学的な原理に基いた理論の研究が必要である。それは、社会学なしに社会史の研究がありえないと同じ理由による。しかしながら、人類発展の諸段階を通じて解明できる身体運動の固有理論を確立し、それぞれの時代、なかでも近代におけるスポーツ発展の一般理論を形成することは容易なことではない。

5. スポーツ史の一般理論

最近ではスポーツ史の基礎理論の確立が叫ばれ、いろいろな見解も発表されるようになった。しかし、何が独自の研究領域であるかとなると、その解答は、まだ仮説的な試案にとどまり、いまのところスポーツ史発展の一般理論も手探りの状態にある。人間の姿勢と運動の原型特性を探究するためには、サルから霊長類、さらに樹上生活から大地におりたヒトの相違を理解することも必要であろう。そしてスポーツ史の視野は、人間に独自の「二足前進運動」を基本にした運動発達に向けられる。人間は環境に即して運動の形態や技能を発達させてきた特殊な動物であり、野蕃、未開、文明の諸段階をへて、今日にいたるまで、人間独自の多様な身体運動と、その文化を形成してきたのである。したがって、このような人間の運動と、運動をする人間についての発達の諸段階に関して、歴史的検討を加えることは、われわれの緊急事である。

元来、「走る」とは獲物を取るために追いかける、あるいは敵から逃げるための具体的、全体的活動であり、「登る」とは果実を取るため、あるいは帆をたためるためにのぼる活動であり、「投げる」とは手の届かないところに物を移し、あるいは敵を攻撃したりするための活動である。だから、それは生産、軍事、日常生活の必要性から生じた実用

術である。

初期の段階における運動競技や身体修練の形態や機能は、狩猟段階や農耕段階において、またそれぞれの地域や時期によって、いろいろな変化を生じた。しかし、それらは一般的にいて、未開社会の共同体を基盤にした未分化の「原型」(Urformen)である点に共通な特徴をもっている。今日からみてスポーツ的な運動形態に解される活動も、それらは日常生活や労働や軍事の実用的形態として、あるいは神聖な宗教的儀式や呪術の形態として存在したのである。

農耕段階になって、民衆が農作業を行なうようになってからは、狩猟段階のように多様で自由で創造的な運動は減少した。人間の運動は、生産のプロセスに応じて極端に制限され、運動学的にみても、人間に不幸な時代が訪れはじめた。しかし一方では、人間の文化は、この段階にいたるや、これまで実用性や儀式性に融合し埋没していた遊戯や運動競技が自己目的化し、次第にその形態を整えはじめる。それが貴族的遊戯へと階級化していった点に問題があるとはいえ、この段階になって人間の遊びが新しい精神性と文化性を獲得していった点は注意されねばならない。それと同時に、運動遊戯や運動競技の形態も新しい社会的機能を獲得し、古い機能を喪失していく。

運動形態と、文化や社会との関係は、その担手によって大きな影響をうける。日本の運動遊戯史においても、貴族を担手とした王朝風の運動形態は、あの独特な蹴鞠形態に代表されるように、ルールやマナー、組織や精神において、それなりの純化をとげた。騎士や武士を担手とした騎馬競技においても、町人を担手とした市民的運動遊戯にしても、これらの現象形態を支える社会とその精神を無視して、その全体を理解することはできない。

最近の専門誌で、西ドイツのヨーンはスポーツ科学の発展にもかかわらず、スポーツ史の研究が低調であることを論じ、それは何よりもまず理論的究明の不足にあることを指摘している²¹⁾。これまでスポーツ史の理論的関心を欠いていたアメリカ²²⁾やカナダ²³⁾で、最近、スポーツ史の全国的、国際的な学会の組織や機関誌の発刊が進められて

きたのに反して、伝統のあるドイツやオーストリアでこのようなことがいわれるのは、皮肉のようにも思われる。もちろん西ドイツでは、ヨーンの指摘にもかかわらず、個人的な多くの力作もあり、われわれからみれば、その研究水準は決して低いとは思われない。しかし、より高い次元から反省しなおしてみると、欧米も日本も、スポーツ史の基礎理論の確立は、これからであるといえよう。

引用文献

- 1) Coubertin, Pier de. "Charte de la réforme sportive". 1930.
- 2) Rice, A. E., Hutchinson, J. L. and Lee, M. "A brief History of physical education". p. 296, 1958.
- 3) Erbach, G. "Sportwissenschaft und Sportsoziologie", Theorie u. Praxis d. K.K., H10, s. 877, 1965.
- 4) Groll, H. "Idee und Gestalt der Leibeserziehung von Heute", s. 17, 1962.
- 5) Eppensteiner, F. "Der Sport", s. 30, 1960.
- 6) 前川, 猪飼, 他「現代体育学研究法」, p. 3, 大修館, 1972.
- 7) "Der Sport in Wissenschaft und Praxis", vorträge gehalten anlässlich der Davoser Wissenschaftlichen Sportwoche, s. 7, 89, 1927.
- 8) Piaschewski, G. "Gibt es eine Sportwissenschaft", Leibesübungen, H. 2, s. 39~40, 1933.
- 9) "Sportwissenschaft", herausgeben vom D. S. und A.D.L., I. Jahrgang 1971, Verlag K. Hofmann.
- 10) Caillois, R. "Structure et classification des jeux", Diogène 12, pp. 62-75, 1955.
- 11) Dumazedier, J. "Some remarks on sociological problems in relation to physical education and sports." Intern. Rev. Sport Soc. 3, pp. 5-16, 1968.
- 12) Harris, H. A. "Greek athletes and athletics", 1964., "Spot in Greece and Rome", 1972.
- 13) Robinson, R. S. "Sources for the history of greek athletics", 1955.
- 14) "I. Internationaler Sportärzte-Kongress", Berlin, 1936, Georg Tieme, Leipzig, 1937.
- 15) O. Grupe, D. kurz, and J. M. Teipel, "The scientific view of sport", published on behalf

- of the O. C. for The Games of the XXth Olympiad Munich, p. 217, 1972.
- 16) Grupe, O. "Grundlagen der Sportpädagogik", s. 8, 1969. "Sportwissenschaft", I Jahrgang. 1971-1, s. 16., Beyer, E. "Reclams Sportführer", s. 37, 1971.
- 17) Kenyon, G. S. "A sociology of sport, on becoming a sub-discipline", in Brown and Cratty, "New perspectives of man in action", p. 171, 1969.
- 18) スポーツ史では、特殊史的研究という、種目別のスポーツ史をさすこともある。
- 19) Watson, G. "Time for interchange among historians and sociologists of sport, in Canadian Journal of History of S. a. P. H. II-2, pp. 73-80, 1971.
- 20) Iron, A. L. "A brief history of research on the acquisition of skill", in Bilodeau "Acquisition of skill", pp. 1~46, 1966.
- 21) John. Hans-Georg. "Zur Legitimation sport-historischer Fragestellungen", Leibesübungen-Leibeserziehung, H. 6, s. 122-126, 1974.
- 22) "The Journal of Sport History", edited by the northamerican society for sport history, 1974~.
- 23) "Canadian Journal of History of sport and Physical Education", edited by A. Metcarfe, 1970~.